

# 伊勢式年遷宮

(伊勢式年遷宮 その三)

今 口 鷲 外

(先月号より) ホテル「伊勢神泉」のロビー・エレベーター前には小生の愚作が掛かっている。西行の歌二首を書いたものである。

西行は伊勢にも縁が深い。―何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさになみだこぼるゝ―はあまりに知られた西行作とされる一首である。

出家した当初からしばしば伊勢を訪れて、二見浦など所々で草庵を結んでいる。(高野山をすみうかれて、伊勢国二見浦の山寺に侍りけるに、大神宮の御山をば神路山と申す、大日如来の御垂迹をおもひてよみ侍りける)として、―深く入りて神路の奥を尋ぬれば、又うへもなき峯の松風―と詠んでいる。時代でいえば同じ頃源義経が伊勢大神宮に詣でて、所願成就のため度々合戦に間帯したものと、金作りの剣を奉納している。文治二年というから平家滅亡の翌年であり、頼朝と不和になり、後白河法皇が出した義経追討の故に義経の命は正に風前の灯、そんな折での大神宮への祈願は頷けるに充分なものであろう。

西行はまた齋宮についてもふれている。―いつかまた齋宮の宮のいつかれて 注連のみ内に塵を払はん―と、時の内乱故十六年間伊勢の齋宮が在りしままなかつたので、いつになれば再び齋宮が精進潔斎なさつて、注連繩をはった内が清らかに成るのだろうか、悲しんでいる。

時代は下つて、西行を慕つてやまない芭蕉、その伊勢参宮の折、外宮奉納のため神官の宅で催された句会で、先述の西行が歌―何事のおわしますかは―が頭をよぎつたのか、―何の木の花とは知らずひかな―と認めている。

伊勢では諸祭事が滞りなく行われ、十月二日夜には内宮でご神体が新正殿に移る「遷御の儀」が営まれた。つづいての五日には外宮でと。いのちのよみがえり「常若」の精神を表わす日本の文化の象徴といえる二十年一度の式年遷宮のこの年、およそ一千万人という今までにない多くの人々が伊勢を訪れたと聞く。

現代に至るまでいつの時代にも多くの人々が我が国と己が来し方を振り返り行く先を想うことで、清らかな心で又新たな明日を目指し歩み始めてきたのである。故きを温ね新しきを知る。この先如何なる世の中となつてゆくのか、そして私共はいかに生きべきかと、少し立ち止まつてここは謙虚に先人の心と知恵に向き合つてみても良いかもしれぬと、世人等しく感じたことであらうと思う。

(この稿おわり)



器市行灯絵ノ一